（財）日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第６巻, 102-107, 2010
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.6,102-107,2010

北京五輪および世界陸上競技選手権ベルリン大会における国際審判員の判定傾向分析

法元康二 [1)]
1）茨城県立医療大学

はじめに

国際陸連（IAAF）は競歩審判員育成・資格認定制度を定めており，五輪，世界選手権，ワールドカップ競歩などジュニア・ユースを含めた世界レベルの国際競技会で判定が可能なレベルⅢ審判員（International Race Walking Judge ： IRWJ）と大陸別選手権などエリアレベル競技会で判定可能なレベルⅡ審判員（Area Race Walking Judge ： ARWJ）はIAAFが主催する研修会での競技会運営および歩型判定に関する研修・資格認定が行われ、IAAFが監修した教材と試験問題のみを用いている．2002年以前は国際競歩審判員のランク付けは行われていなかったが，2002年秋にIAAF主催の研修会・資格認定試験が実施され，レベルⅠからⅢまでのランク付けが行われた．その結果，それまで120名強の審判員の中から大会ごとに国際審判員から委嘱が行われていたのが，試験によって絞り込まれた34名のIRWJ・レベルⅢ審判員の中から委嘱が行われるようになった．個々の大会における審判員の委嘱はLOCおよびIAAFが行うことになっており，特定の審判員および地域に偏ることがないように配慮して委嘱が行われるようになっている．

さらに，IAAFは競歩審判員倫理規定（Code of Ethics）を定め，国際競歩審判員が特定の国・地域のチームの一員として行動することを禁じ，具体的な禁止事項を挙げながら大会期間中にそのような行動があった場合には一定期間の資格停止または資格剥奪などの処分を行うなどの制限を盛り込んでいる．その延長線上には倫理上不適切な行動のあったチームおよびコーチ，競技者に対して規定上に明文化されていなくても何らかの処分があると考えるのが当然であり，審判，コーチ（チーム），競技者の三者に対して高い倫理観を求めることによって競歩種目の価値を保つようなシステムとなっている．

ところが，上に挙げたようなシステムに対して個々の競歩審判員の判定技能研修に関しては2002年のレベルⅢの資格認定試験以降は2009年5月の欧州杯（フランス・メツ）と同時に行われたIRWJ中間研修まで行われることはなく，個々の審判員のそれまでの経験および技量，また，各大会中の各種目の実施前後に競技規則に基づいて行われる審判ミーティングの席上の判定基準のすり合わせに委ねられているのが実情である．世界各国に分散している全てのIRWJ審判員を全てが参集することの困難さはあっても，判定基準の統一に向けた議論および研修の機会はわが国の国内審判員を対象とした研修の機会（法元，2010）と比べて著しく少ないといった印象は否めない．IRWJとして選抜された時点で判定技能や競歩の歩型に関する理解が非常に高いということを割り引いても，こういった現状は競歩種目の世界全体での普及・振興のために放置すべきではなく，また，我が国からも課題解決に向けてIAAF 競歩委員会の日本人委員による提案や日本陸連科学委員からの情報提供（IAAF，2005；DaMilano et al.，2008）を行っている．

このような国際審判員の技能研修，判定基準の統一に向けた課題がある一方で，世界大会における上述のような国際審判員委嘱システムを踏まえた日本代表選手の判定対策として，筆者は北京五輪および世界選手権ベルリン大会を前に当該大会で委嘱される競歩審判員の判定傾向の調査と各代表選手のコーチに対する情報提供を行った．本報ではチーム戦術となった競技者ごとの提案事項については公開せず，それ以外の情報を報告することによって，今後のわが国における審判員評価および研修に資するための情報提供としたい．

方法

競技規則において競技中・後の作成が義務付けられている競歩審判集計表（各審判員が各競技者に与えた注意および赤カードの種類と時刻を集計したもの）は，公開が規制されていないため競技会後には審判員およびコーチ，競技者に配布され技能研鑽のための資料として活用されている．また，競技会ごとの審判員編成情報も事前公開が規制されていない．

そのため，北京五輪およびベルリン世界陸上を前に，これまで我国に招聘してきた国際審判員などの人的ネットワークを活用してそれぞれの審判員編成情報を事前に入手し，また，主要大会後に同じ人的ネットワークを活用して入手してきた競歩審判集計表をもとに各審判についてそれぞれ以下の指標を算出した．

①失格率：各審判の出した赤カードのうち，失格となった競技者に出した赤カードの比率．失格となるべき選手に対し的確に赤カードを出していたかどうかの指標となる．

②１枚赤カード率:各審判の出した赤カードのうち，他の審判が赤カードを出していない競技者に対して赤カードを出した比率．他の審判と比較して判定基準がずれていたかどうかの指標となる．

③ロスオブコンタクト・ベントニー比：各審判の出した赤カードのうち，ロスオブコンタクトとベントニーの比率

以上の①―③のほかに，各大会において日本選手に対して各審判員が与えた注意および赤カードの枚数，種類についても整理し，審判ごとの傾向を専任コーチに対して報告したが，各選手の戦術に関する事項であったことから本報では公開しないものとする．

なお，算出根拠となった主要国際競技会は以下のとおり．

2003 年：パリ世界陸上
2004 年：アテネ五輪
2005 年：ヘルシンキ世界陸上
2006 年：ワールドカップ競歩ラコルーニャ大会
2007 年：大阪世界陸上
2008 年：IAAF 競歩チャレンジ北京大会（北京五輪プレ大会），北京五輪
2009 年：IAAF 競歩チャレンジセストサンジョヴァンニ大会，ラコルーニャ大会，ベルリン世界陸上

結果

① 北京五輪

当初，主任審判員を担当予定であった Marlow (GBR) は編成に入らず，代わって Bianchi (SUI) が主任審判員を務め,Bianchi に代わって Khoo(MAS) が審判員を務めた．本報では事前に入手した審判員編成情報に基づく各コーチへの情報提供と，実際の競技会での判定傾向の比較を主眼に置いているので Khoo(MAS)の判定に関する各指標の掲載は割愛した．

表 1-1 に示したのは，北京五輪における競歩審判員の失格率である．失格率が 0.4 より低い場合には網掛けで強調した．IAAF チャレンジ北京大会（北京五輪プレ大会）までの時点で，Bianchi (SUI), Fletcher (AUS), Wang (CHN), Westerfield (USA), Wrigley (NZL) の各審判は過去の大会において非常に低い失格率を示す場合があり，必ずしも失格となってしかるべき競技者のみに赤カードを出しているわけではないことから，これらの審判の評価が偶然であったとしても一致した場合には，失格者が大量に発生することを現場向けレポートに掲載した．

北京五輪では男女 3 種目を通じて，Fletcher, Müller (GER), Wang, Wrigley の各審判員が 0.4 より小さい失格率を示したが，次項で示す通り１枚カード率が非常に高く，判定がばらついたことから大量の失格者が発生するということはなかった．

表 1-2 に示したのは北京五輪における競歩審判員の１枚カード率である．１枚カード率が 0.3 以上の場合には網掛けによって強調した．北京五輪プレ大会までの時点では，Dias (POR), Bianchi, Fletcher, Müller, Wang, Wrigley の 6 名の審判員の１枚カード率が高く，これらの審判員は他の審判員とは違った観点で判定を行ってくる可能性があることを現場向けレポートに掲載した．実際の北京五輪のレースでは全ての審判員の１枚カード率が高く，個々の審判の赤カード判定が分散する結果となった．

表 1-3 に示したのは北京五輪における競歩審判員のロスオブコンタクト・ベントニー比である．日本国内で開催される主要ロード競歩競技会では，五輪および世界選手権参加標準記録レベルの競技者に対してベントニーの赤カードが出されることは，外国人の IRWJ を招聘した場合でも非常に少ない．しかし，主要国際競技会ではベントニーの赤カードも頻繁に出されることから，北京五輪を前にして主要大会のロスオブコンタクトとベントニーの赤カード数を整理して現場向けレポートに掲載した．集計の結

表 1-1　北京五輪審判　失格率

審判名	大会名						
	08北京OG	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	04アテネOG	03パリ
José Dias (Portugal)	0.47	0.59		0.44		0.5	0.82
Frederic Bianchi (Switzerland)	Chief	0.67		0.36			
Jordi Estruch (Spain)	0.40	0.75					0.59
Wayne Fletcher (Australia)	0.13	0.33	0.23				
Rolf Müller (Germany)	0.18	0.57			0.57		
Yang Wang (China)	0.11	0.42			0.45	0.08	
Gary Westerfield (USA)	0.45	0.32					
Peter Wrigley (New Zealand)	0.11	0.36					
Peter Marlow (Great Britain)	–	Chief		0.32		Chief	Chief

表 1-2　北京五輪審判　1 枚カード率

審判名	大会名						
	08北京OG	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	04アテネOG	03パリ
José Dias (Portugal)	0.73	0.12		0.39		0.50	1.00
Frederic Bianchi (Switzerland)	Chief	0.17		0.40			
Jordi Estruch (Spain)	0.67	0.17					0.23
Wayne Fletcher (Australia)	0.56	0.42	0.36				
Rolf Müller (Germany)	0.55	0.14			0.38		
Yang Wang (China)	0.50	0.42			0.27	0.54	
Gary Westerfield (USA)	0.73	0.21					
Peter Wrigley (New Zealand)	0.33	0.36					
Peter Marlow (Great Britain)	–	Chief		0.27		Chief	Chief

表 1-3　北京五輪審判　ロスオブコンタクト・ベントニー比

審判名	判定	大会名						
		08北京OG	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	04アテネOG	03パリ
José Dias (Portugal)	～	0.47	0.84		0.67		0.70	
	＜	0.53	0.16		0.33		0.30	
Frederic Bianchi (Switzerland)	～	Chief	0.36		0.40			
	＜	Chief	0.64		0.60			
Jordi Estruch (Spain)	～	0.33	0.39					0.32
	＜	0.67	0.61					0.68
Wayne Fletcher (Australia)	～	0.88	0.67	1.00				
	＜	0.13	0.33	0.00				
Rolf Müller (Germany)	～	0.27	0.50			0.62		
	＜	0.73	0.50			0.38		
Yang Wang (China)	～	0.44	0.50			0.86	0.50	
	＜	0.56	0.50			0.14	0.50	
Gary Westerfield (USA)	～	0.50	0.42					
	＜	0.50	0.58					
Peter Wrigley (New Zealand)	～	0.44	0.47					
	＜	0.56	0.53					
Peter Marlow (Great Britain)	～	–	Chief		0.41		Chief	Chief
	＜	–	Chief		0.59		Chief	Chierf

果，北京五輪プレ大会までの時点では，Bianchi，Estruch（ESP），Marlowがベントニーの方が多い傾向を示していた．そのため，これまでベントニーの赤カードおよび注意を受けたことがない選手にも注意を促すようレポートに掲載した．実際のレースではMarlowは審判員編成から外れたが，Biahchi，Estruchに加えて，Dias（POR），Müller，Wang，Wrigleyらがベントニーの方が多い傾向を示した．しかし，日本選手への赤カードは全てロスオブコンタクトによるものであり，日本国内のレースと同じ傾向であった．

② ベルリン世界陸上

表2-1に示したのは，ベルリン世界陸上（ベルリン）における競歩審判員の失格率である．ベルリン世界陸上で判定にあたった審判員の中にはアテネ五輪（アテネ）で判定を行った審判員はいないため，以下のベルリンのデータにはアテネのデータは含まれない．

北京五輪と同様，失格率が0.4より低い場合には網掛けで強調した．IAAFチャレンジラコルーニャ大会（ラコルーニャ）までの時点で，Dahm（FRA），Fletcher，Westerfield，Bott（GER）の各審判は過去の大会において非常に低い失格率を示す場合があり，北京五輪の事前レポートと同様，これらの審判の評価が偶然に一致した場合に失格者が大量に発生することを現場向けレポートに掲載した．実際のベルリンの男女3種目レースでは，Bottを除く上記各審判に合わせてFröberg(NOR),Govindaraju(SIN)の各審判員が0.4より小さい失格率を示したが，北京五輪と同様に1枚カード率が非常に高く，判定がばらついたことから大量の失格者が発生するということはなかった．

表2-2に示したのはベルリンでの競歩審判員の1枚カード率である．北京五輪と同様に1枚カード率が0.3以上の場合には網掛けによって強調した．ラコルーニャでの時点では，Dahm，Fletcher，Fröberg，Bottの4名の審判員の1枚カード率が高く，これらの審判員はそれぞれの大会で他の審判員とは違った観点で判定を行っている可能性があり，ベルリンでも同様の可能性があることを現場向けレポートに掲載した．しかし，実際のベルリンのレースでは主任として判定に加わらなかったBianchiを除き，上記以外の審判員で1枚カード率が高かったのは，GovindarajuとO'Callaghanに留まり，Westerfield,Yang(CHN),Bottの3名の審判の赤カード判定は分散することはなかった．しかし，男女3種目の赤カードの総数は北京五輪98枚に対して，ベルリンが109枚と多く，そのことでベルリンでの判定が分散していても失格者数は北京五輪10名に対して，ベルリン12名と同程度の失格者数になっていたと考えられる．

表2-3に示したのはベルリンにおける競歩審判員のロスオブコンタクト・ベントニー比である．北京五輪と同様の理由で，各審判員の赤カードをロスオブコンタクトとベントニーのそれぞれで整理し，集計を行った．その結果，ラコルーニャ大会までの時点では，Fröberg，Yang，Bott，Bianchiがベントニーの方が多い傾向を示していた．そのため，北京五輪の事前レポートと同じように，これまでベントニーの赤カードおよび注意を受けたことがない選手にも注意を促すようレポートに掲載した．実際のレースでは全ての審判員でロスオブコンタクトの方が多い傾向を示した．日本選手に対する赤カードでは，O'Callaghanから山﨑選手に対して出されたベントニーを除いてすべてロスオブコンタクトによるものであった．

以上，北京五輪およびベルリンを前に現場向けに提供した全体傾向について示したが，各審判員が日本選手に対して行った判定についても赤カードだけでなく注意を含めて整理し，情報提供を行っている．詳細は戦術と関係するため割愛するが，初顔合わせの審判を除いて概ね過去の大会と同様の判定と同じ判定を本大会（北京五輪，ベルリン）でも受けており，注意で済んでいたものが赤カードに変わった場合に赤カード累積となっている．

おわりに

本報では各種国際競技会における競歩審判集計表の記載事項整理による競技現場への情報提供について報告したが，これ以外にも各競技会前年における国際競技会の判定ムービーによる情報提供および春シーズンのトラック競技会でのバイオメカニクス分析資料の提供などを行ってきた．

しかし，以上のような情報提供にもかかわらず，北京五輪では1名，ベルリン世界陸上では3名の失格者が発生することとなった．各競技会における失格宣告のベースとなる赤カード総数では，北京五輪では延べ7名の出場者数に対して赤カードが9枚，ベルリンでは延べ9名に対して12枚の赤カードとなり，出場者1名あたりの赤カード数では北京の1.29枚に対してベルリンでは1.33枚と情報提供が競技成績に結びついたとは言い難い結果となっている．

表 2-1　ベルリン世界陸上審判　失格率

審判名	大会名								
	09ベルリン	09ラコルーニャ	09セスト	08北京五輪	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	03パリ
Jean-Pierre Dahm (France)	0.19	0.250					Chief		0.469
Wayne Fletcher (Australia)	0.18			0.125	0.333	0.286			
Anne Fröberg (Norway)	0.31							0.485	
S. Govindaraju (Singapole)	0.27								
Pierce O´Callaghan (Ireland)	0.44		0.556						
Gary Westerfileld (USA)	0.39			0.455	0.316				
Shande Yang (China)	0.5					0.467	0.533		
Manfred Bott (Germany)	0.44	0.267	0.273						
Frederic Bianchi (SUI) - Chief				Chief	0.667		0.320		

表 2-2　ベルリン世界陸上審判　1 枚カード率

審判名	大会名								
	09ベルリン	09ラコルーニャ	09セスト	08北京OG	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	03パリ
Jean-Pierre Dahm (France)	0.313	0.375					Chief		0.281
Wayne Fletcher (Australia)	0.545			0.375	0.417	0.333			
Anne Fröberg (Norway)	0.5							0.364	
S. Govindaraju (Singapole)	0.545								
Pierce O´Callaghan (Ireland)	0.556		0.111						
Gary Westerfileld (USA)	0.278			0.182	0.211				
Shande Yang (China)	0.167					0.067	0.267		
Manfred Bott (Germany)	0.133	0.267	0.455						
Frederic Bianchi (SUI) - Chief				Chief	0.056		0.320		

表 2-3　ベルリン世界陸上審判　ロスオブコンタクト・ベントニー比

審判名	判定	大会名								
		09ベルリン	09ラコルーニャ	09セスト	08北京五輪	08北京プレ大会	07大阪	06ワールドカップ	05ヘルシンキ	03パリ
Jean-Pierre Dahm (France)	～	0.688	0.875					Chief		0.69
	＜	0.312	0.125					Chief		0.31
Wayne Fletcher (Australia)	～	1.00			0.875	0.583	1.000			
	＜	0.00			0.125	0.417	0.000			
Anne Fröberg (Norway)	～	0.688							0.438	
	＜	0.312							0.562	
S. Govindaraju (Singapore)	～	0.636								
	＜	0.364								
Pierce O´Callaghan (Ireland)	～	0.778		0.545						
	＜	0.222		0.455						
Gary Westerfileld (USA)	～	0.889			0.636	0.947				
	＜	0.111			0.364	0.053				
Shande Yang (China)	～	0.778					0.267	0.400		
	＜	0.222					0.733	0.600		
Manfred Bott (Germany)	～	0.667	0.600	0.222						
	＜	0.333	0.400	0.778						
Frederic Bianchi (SUI) - Chief	～				Chief	0.389		0.400		
	＜				Chief	0.611		0.600		

また，2003年以降の主要世界大会での日本チーム出場者1名あたりの赤カード数では，パリ世界陸上で2.40枚だったのが，アテネ五輪で1.60枚，ヘルシンキ世界陸上で0.43枚，ラコルーニャW杯で0.25枚と劇的に減少してきたものの，大阪世界陸上で0.56枚と再び増加に転じ，その後北京五輪1.29枚，ベルリン世界陸上1.33枚と年々日本選手に対する厳しい歩型評価が下されるようになってきたといえる．しかし，2004年の国内審判制度改革以降にジュニア競技者として育った年代，とりわけ男子に限っていえば世界大会で受ける赤カードは皆無であり，2004年以降は歩型に問題がない，すなわち高い競技水準を目指す前提条件をジュニアの段階で備えているタレントのみがシニア移行後に活躍するようなシステムとなったと考えることもできる.そのため，大きな流れとしては審判制度改革およびそのための情報提供は若手競技者の競技力向上として結実しつつあると考えられ，ロンドン五輪あるいはその先のリオデジャネイロ五輪以降に現在の強化競技者の上を行く競技水準が期待できよう.

しかし，2004年以前にシニアに移行した現在の強化競技者のフォーム改善といった課題も依然として存在しているが，2007年以降の日本チーム平均赤カード数の増加が示す通り，ここ数年の間，競技水準レベルアップの前提となるルール適合のための技術の向上を軽視して競技水準の向上を求めてきた感は否めない．また，歩型に対してこれまで提供してきた情報の浸透度にも現状では限界があることから，そのような情報，とりわけバイオメカニクス分析結果を踏まえて「わざ言語」まで落とし込んだ形でのコーチング技法を検討し，その上でパーソナルコーチおよび競技者へ情報提供することが必要であろう.

文献

DaMilano, M., Vizini,V., LaTorre, A., Saladie-LaFuente, L., Hoga, K., and Ae, M. (2008) La Marcia-Percorso attraverso la specialita piu medagliata dell'Atletica Leggera Italiana. Commisione Giudici Marcia e Settore Tecnico Marcia: Roma.

法元康二（2010）国際競技会における競歩のロス・オブ・コンタクト判定．月刊陸上競技，43（1）：211-213.

International Association of Athletics Federations (2005) Materials for IAAF CECS Level Ⅱ Race Walking Judges Course. Unpublished materials.